**千年王国説の歴史的変遷**

**ハーベスト・タイム・ミニストリーズ代表**

**中川健一**

**PART I：　千年王国に関する3つの説**

**イントロダクション**

（1）教会史は、神がご自身の教会をどのように建設してこられたかの記録である。

（2）「神の国」の解釈に関して種々の論争があった。

　　（3）アウトライン

　　　　PART I：千年王国に関する3つの説

　　　　PART Ⅱ：千年王国説の歴史的展開

　　　　　　Ⅰ．千年期前再臨説

　　　　　　Ⅱ．無千年王国説

　　　　　　Ⅲ．千年期後再臨説

　　　　　　Ⅳ．千年王国説の復興

　　　　PART Ⅲ：千年王国説の聖書的吟味

**Ⅰ．「神の国」に関する預言**

**1．ダニ2章**

（1）ネブカデネザルが見た夢をダニエルが説き明かした。

　　　　①神の国が成就する前に、歴史はどのように動いていくかを神が王に示した。

　　　　②「異邦人の時」という概念

Luk 21:24 人々は、剣の刃に倒れ、捕虜となってあらゆる国に連れて行かれ、異邦人の時の終わるまで、エルサレムは異邦人に踏み荒らされます。

Rom 11:25 兄弟たち。私はあなたがたに、ぜひこの奥義を知っていていただきたい。それは、あなたがたが自分で自分を賢いと思うことがないようにするためです。その奥義とは、イスラエル人の一部がかたくなになったのは異邦人の完成のなる時までであり、

　　（2）王は、夢で一つの大きな像の幻を見た（異邦人の4大帝国の興亡）

　　　　①頭は純金（バビロン帝国）

②胸と両腕は銀（メド・ペルシヤ連合帝国）

③腹とももは青銅（アレクサンドロス大王のギリシヤ帝国）

④すねは鉄、足は一部が鉄、一部が粘土（第4の帝国‐帝国主義）

⑤一つの石が人手によらずに切り出され、像の鉄と粘土の足を打ち砕いた。

　　＊その像を打った石は大きな山となって全土に満ちた。

　　＊この山は、メシア的王国（千年王国）を象徴している。

**2．ダニ7章**

（1）2章の幻と７章の4つの幻の対比

　　　　①前者はネブカデレザルが、後者はダニエルが見た。

　　　　②前者は人間の視点から見たもの（栄光に輝く巨大な像）。

③後者は神の視点から見たもの（大きな獣）。

　　（3）4つの幻

①第1の幻：3頭の大きな獣

　　　　②第2の幻：第4の獣

＊10本の角を持っていた。

＊11本目の小さな角が出てきて、初めの角のうち3本が引き抜かれた。

＊この小さな角は人格を持ち、豪語する口を持っていた（反キリスト）。

　　　　③第3の幻：天の法廷

　　　　　　＊神が裁きの座に着くと、告訴された者たちの行為を記した文書が開かれる。

　　　　　　＊第4の獣は突然の終焉を迎え、神の国が確立する。

　　　　④第4の幻：人の子のような方

　　　　　　＊父なる神は、ここでメシアに「主権と光栄と国」を与える。

＊諸民、諸国、諸国語の者たちがことごとく、メシアに仕えるようになる。

＊その御国は永遠に滅びることがない。

**3．ダニ2章と7章は、将来の神の国に関する預言である。**

（1）それ以外の聖句

　　①イザ2：1～5参照

　　②ミカ4：1～8参照

　　（2）教会史の中で、将来の「神の国」に関して3つの解釈が提唱されてきた。

　　①Premillennialism（千年期前再臨説）

　　②Amillennialism（無千年王国説）

　　③Postmillennialism（千年期後再臨説）

（3）千年王国はラテン語で、mille（1,000）＋annum（年）、である。

①「millennium」（千年王国、「神の国」と同義に使われる）

②「millennialism」（千年王国説、千年王国を信じる信仰）

　　（4）千年王国の預言が与えられている意味

　　　　①苦難の中にいる聖徒たちへの励ましの預言である。

　　　　②それが、現代の私たちにとってどういう意味があるのか。

**Ⅱ．千年王国に関する3つの説**

**1．Premillennialism（千年期前再臨説）**

（1）「Pre」は、「Before」（前）という意味。

　　①キリストは、地上に神の国を設立するために戻って来られる。

　　　　②その神の国は、この地上で千年間続く。

（2）教会時代の初期、千年期前再臨説は「chiliasm」（1000という意味）と呼ばれた。

　　①黙20：1～7が根拠である。

**2．Amillennialism（無千年王国説）**

（1）「A」は、「No」という意味である。

　　　　①無千年王国説は、地上に文字通りの神の国が出現するわけではないとする。

　　　　②この意味での神の国は、今の時代の教会からなっている。

　　　　③メシアの再臨後、すぐに永遠の秩序が始まる。

**3．Postmillennialism（千年期後再臨説）**

（1）「Post」は、「after」（後）である。

　　　　①キリストは、千年王国（神の国）が成就した後に再臨される。

　　　　②地上には文字通りの神の国が出現する。

　　　　③人間の努力によって（科学や文明の進歩）、理想的な状況が訪れる。

　　　　④それゆえ、教会は神の国を出現させるための協力者となるべきである。

**PART Ⅱ：　千年王国説の歴史的変遷**

**Ⅰ．千年期前再臨説**

**1．初期の教会の指導者たちの見解**

はじめに

　　　　①最初、Premillennialism（千年期前再臨説）は、キリアズムと呼ばれた。

　　　　②紀元1～3世紀には、これが正統的な信者の間で最も支持を集めた説である。

　　（1）殉教者ユスティノス（Justin Martyr）

　　　　①100-165年頃に活躍。職責はないが、巡回伝道者、キリスト教の護教者。

　　　　②『ユダヤ人トリュフォンとの対話』 - ユスティノスの聖書解釈を示す著作。

③「正しい信仰を持つ者はみな、死者の復活、再建され拡張されたエルサレムでの

千年間を確信している。預言者エゼキエル、イザヤ、その他の預言者たちが預言し

た通りである」

④これは、ユスティノスの時代には、千年期前再臨説が正統的な信仰であったこと

を証明している。

　（2）エイレナイオス（Irenaeus）

①古代のキリスト教理論家であり、司祭である。

②彼は、「主は、将来の御国と自然界の回復を約束された」と書いている。

＊動物界は、人類の堕落の前の状態に回復され、草食となる。

＊人間が、回復された自然界を支配するようになる。

＊イザ11：6～9の理解

　　　　③彼は、御国の預言を比喩的に解釈することに対して警告を発している。

＊「もしこの種の預言を比喩的に解釈するなら、聖書解釈に関して一貫性がな

くなり、議論している箇所の理解に関する混乱が生じる」

**2．歴史家の証言**

はじめに

　　　　①歴史家たちは、キリアズムが原初的終末論であったことを認めている。

（1）エドワード・ギボン（Edward Gibbon）（1737‐1794年）

　　①イギリス人の歴史家で、『ローマ帝国衰亡史』の著者

　　　　②「キリアズムの教理は、キリストの再臨と密接に結びついていた」

　　　　③「天地創造の6日間を基に、今の時代は6千年続くとされた」

　　　　④「7日目の安息は、今の時代の次に来る千年の安息と見なされた」

　　（5）アドルフ・ハルナック（Adolph Harnack）

①19世紀後半～20世紀初頭にかけて活躍したドイツ人の歴史家。

＊ルーテル派神学者。ニカイア会議以前（100-325年）の教会史の専門家。

②「キリストの再臨とそれに続く地上でのキリストの栄光に溢れた統治が近いと

いう信仰が生まれた」

③「この信仰は非常に早い時期から見られるものであり、キリスト教信仰の不可欠

の要素と見なすべきではないかと思う」

④「初期の伝道では、この内容が宣言され、それが成功の一因となった」

⑤「もし、信条をまとめる必要性があったなら、これはそこに含まれたであろう」

　　　　⑥自由主義神学者である彼が、千年期前再臨説に好意を持つ理由は何もない。

**Ⅱ．無千年王国説**

**1．東方教会における千年期前再臨説の否定**

（1）千年期前再臨説の次に、無千年王国説が登場した。

①2世紀、東方のギリシア教会の中から無千年王国説を主張する者が現れた。

　　　　②5世紀までに、無千年王国説が主流になる。

（2）170年、小アジアにあったアロゴイというグループが、黙示録をおとぎ話として

否定した（さらに、ヨハ1章のロゴス神学を否定した）。

（3）千年期前再臨説の否定が広がった理由

①モンタニスト論争（160‐220年）

　　　　　　＊新しい啓示と聖霊体験を強調した。

＊彼らは、千年期前再臨説に立っていた。

　　　　　　＊そのため、千年期前再臨説そのものが疑問視されるようになった。

　　　　②ローマ帝国による迫害

＊千年期前再臨説を唱えることは、ローマ帝国との軋轢を増すことになる。

　　　　③教会制度への脅威

　　　　　　＊千年期前再臨説の強調は、現存する教会への脅威である。

　　　　④東方教会における反ユダヤ的傾向

　　　　　　＊異邦人クリスチャンたちがユダヤ人を「キリスト殺し」と呼ぶようになった。

＊ユダヤ的なものはなんでも否定するようになった。

＊千年期前再臨説の希望は、本来ユダヤ的なものである。

　　　　⑤新神学の影響

　　　　　　＊アレキサンドリヤ神学と呼ばれるもので、ギリシア教会で発展した。

　　　　　　＊オリゲネス（185‐253年）や他の学者たちは、ギリシア哲学とキリスト教

神学の融合を目指し、アレキサンドリヤ神学と呼ばれる新神学が誕生した。

＊一般的にギリシア哲学では、物質的なものは本来的に悪であり、完全に霊的

なものこそ善であると考えられた。

＊地上に出現する物質的に豊かな政治的王国は、悪である。

＊完全に霊的な王国こそ、善である。

＊関心は、将来において地上に出現する御国から、現在の時点で信者の心に宿

る御国に移行した。

＊ギリシア教会のほとんどが千年王国を拒否するようになった。

　　　　⑥オリゲネスは、新しい聖書解釈の方法を考案し、提唱した。

　　　　　　＊これを比ゆ的解釈、あるいは、霊的解釈という。

　　　　　　＊千年期前再臨説は、旧約預言の字義通りの解釈、歴史的・文法的解釈に依拠

している。

＊オリゲネスは旧約預言に比ゆ的解釈を施し、千年期前再臨説を否定した。

＊ギリシア教会は、オリゲネスの解釈を広く採用した。

　　　　⑦ギリシア教会は、4世紀になると、黙示録を正典から外した。

＊その状態が数世紀続き、キリアズムは墓の中に葬り去られた。

＊中世の終わりに、ギリシア教会は黙示録を正典に戻したが、キリアズムに対

する偏見を修正することは不可能であった。

＊しかし、千年期前再臨説を支持する東方教会も存在した。

　　・アルメニア教会、シリア、アルバニア、エチオピア教会など

**2．西方教会における千年期前再臨説の否定**

（1）西方教会では、4世紀になっても、千年期前再臨説は正統的な信仰であった。

　　　　①東方教会の比喩的解釈の影響を受けなかった。

②西方教会は、ヨハネが黙示録の著者であることと、その書の正典性を認めた。

　　　　③4世紀以降、千年期前再臨説に対する反抗が始まる。

　　（2）アレキサンドリヤ神学が紹介された。

①ヒエロニムス（Jerome、345‐420年）や（アンブローズAmbrose、ミラノの

司教）によってもたらされた。

②ヒエロニムスは、ギリシア人の神学者から数年間学んだ結果、自分は「ユダヤ

的選択肢」から解放されたと宣言した。

　　（3）アウグスチヌス（354‐430年）は、千年期前再臨説から無千年王国説に変化。

　　　　①その理由は、教会を取り巻く政治状況の変化である。

＊ローマ帝国は崩壊しても、教会は支配領域を拡大していった。

＊この状況で、アウグスチヌスは、千年期前再臨説は時代遅れだと考えた。

　　　　　　＊教会こそがダニ2章、7章、黙20章などが預言するメシアの王国であると

いう説を最初に唱えた。『神の国』。

＊聖徒たちは今、キリストとともに御国を統治している。

　　　　②回心前の堕落した生活の影響で、地上的なものを否定的に見る傾向があった。

　　　　③ギリシア哲学の影響を受けた。

　　　　　　＊改心前にギリシア哲学の学びに没頭していた。

　　　　　　＊神の国が善であるためには、それが霊的なものでなければならない。

　　　　　　＊預言書と黙示録の解釈に、オリゲネスの手法を用いた。

　　（4）アウグスチヌス以降

　　　　①アウグスチヌスの比喩的千年王国説が教会の正統的な教理となった。

　　　　②千年期前再臨説は、地下に潜った。

　　　　③中世期に、ローマ・カトリック教会は、無千年王国説を強力に推し進めた。

　　　　④宗教改革の時代、多くのアナバプテストは千年期前再臨説を採用した。

　　　　⑤ルーテル派、改革派、聖公会は：

＊千年期前再臨説を「ユダヤ的な見解」として退けた。

　　＊彼らは、アウグスチヌスの無千年王国説を採用した。

**Ⅲ．千年期後再臨説**

**1．無千年王国説の否定**

（1）17世紀になって知的革命が起こり、無千年王国説を否定する者が多く出て来た。

　　　　①科学の発展により、物質世界に対する興味が増した。

　　（2）ヨーロッパの知識階級は、宇宙の字義通りの理解に非常に興味を持った。

　　　　①望遠鏡によって宇宙の観察が行われた結果、比喩的な宇宙論は信用を無くした。

②やがて、字義通りの解釈は、聖書学者にも影響を与えるようになった。

　　（3）ジョゼフ・ミード（Joseph Mede、1586‐1638年、聖公会の神学者）

①神の国の字義通りの解釈に取り組んだ結果、聖書は文字通りの神の国の約束を

与えていると結論付けた。

②初期の教会の信仰である千年期前再臨説を採用。同意する多くの学者が出た。

**2．千年期後再臨説の出現と発展**

（1）17世紀の学者で、文字通りの御国の成就を信じながら、千年期前再臨説を採用し

ない者たちが出て来た。

　　①この第3の立場が、千年期後再臨説である。

　　（2）ダニエル・ホイットビィ（Daniel Whitby、1638‐1726年）

①彼は、キリストの神性を否定する英国のユニテリアンである。

②彼は異端として断罪されたが、彼の千年期後再臨説は広まった。

③時代背景が、彼の考え方を歓迎した。

④将来、教会に黄金時代が来るという教えは、人々が聞きたかったものである。

　　＊種々の問題や葛藤があるが、歴史は上向きである。

　　＊理想郷は、人間の努力を通して徐々に進歩し、実現する。

　　＊理想郷は、キリストの再臨によって成就するのではない。

**3．保守的千年期後再臨説**

（1）聖書の霊感を信じる人々が提唱した。

　　　　①旧約聖書に預言された将来の平和と義の時代は、歴史上、文字通りに成就する。

　　　　②神の民が福音を伝え、最終的には全世界がキリスト教化される。

　　　　③つまり、将来の御国の成就のために、教会が主要な役割を演じるのである。

　　　　④キリストは、神の右の座に座して、天から統治する。

　　　　⑤キリストの再臨は、黄金時代の結末として起こる。

　　　　⑥再臨の時に、すべての死者の復活と、すべての人間の裁きが行われる。

　　　　⑦それから世の終わりとなり、永遠の秩序が始まる。

　　（2）ジョナサン・エドワード（Jonathan Edwards、1703‐58年、アメリカを代表す

る会衆派の神学者、プリンストン大学第3代学長）

　　　　①彼は、新大陸の発見と移住が、千年王国の設立と密接に関連していると考えた。

　　（3）19世紀には、多くのプロテスタントの牧師たちが、アメリカは神の国をもたらす

ために重要な役割を演じると信じた。

①19世紀の「Manifest Destiny」（自明の宿命説）：西部開拓の使命

②牧師たちは、アメリカは大西洋から太平洋に至る全大陸を支配下に置き、そこか

ら全世界を千年王国に導くように神から命じられていると、説教した。

③千年期後再臨説は、アメリカの奴隷解放運動にも影響を与えた。

④多くのクリスチャンが、南北戦争に勝利することが、地上における神の国の成就

に一歩近づくと考えた。

**4．自由主義的千年期後再臨説**

（1）自由主義神学者が提唱した。

　　　　①19世紀後半から20世紀前半に流行した。

　　　　②保守的千年期後再臨説と同じく、楽観的歴史観を有する。

　　　　③将来、地上に黄金期（神の国）が成就すると信じる。

　　（2）保守的千年期後再臨説との差異

　　　　①人間の罪性を否定。人間は完全ではないが善良である。

　　　　②人間は完全になり得ると信じる。

　　　　③イエス・キリストは救い主ではなく、偉大な教師である。

　　　　④聖書が語る福音に代えて、「社会的福音」を語る。

　　　　　　＊教会の使命は、社会を社会的悪から贖うことである。

　　　　　　＊戦争、貧困、人種差別、不正義、病気、不平等などから社会を贖う。

　　　　　　＊神は普遍的に父であり、人類はみな兄弟である。

　　　　⑤神の国は、教会と他の人間的組織が、自然の方法と人間が考案した方法を用いる

ことによって地上に成就する。

　　（3）第三共和政フランスの人々が自由の女神像をアメリカに贈った（1886年）。

　　①この行為は、自由主義的な千年期後再臨説の表現である。

　　②贈呈したフランス人は、アメリカの独立とフランス革命が、民衆を専制君主の圧

制から解放すると信じた。

③特に、アメリカが民主主義を通して、世界を自由の時代へと導くと信じた。

**5．千年期後再臨説の衰退**

　　（1）千年期後再臨説は、19世紀のプロテスタントの主要な終末論であった。

　　　　①カルビン主義、アルメニウス主義、ユニテリアンはみなこれを採用した。

　　　　②社会の進歩があり、大英帝国を中心にほぼ100年の平和が続いた。

　　　　③表面的には、これが正しい終末論のように見えた。

　　（2）1914年の第一次世界大戦が状況を変えた。

　　　　①人類の罪性がそれまでの時代以上に明確に現れた。

　　　　②カール・バルトは、それまで自由主義神学から教わった人間の善良さを否定する

ようになった。人間は本質的に罪人である。

③多くの牧師が、この戦争はすべての戦争を終わらせるための戦いである、それゆ

え、勇敢に戦えとメッセージをした。

（3）米国大統領ウィルソン

　　　　①彼は、民主主義を守るために、アメリカの参戦を決意した。

　　　　②戦後、国際連盟の創設に尽力し、話し合いによる平和を夢見た。

　　　　③しかし、国際連盟は数年で失敗に終わった。

　　（4）1930年代に世界恐慌が襲った。

　　　　①ナチスはユダヤ民族を抹殺しようとした。

　　（5）1930年代後半に、第二次世界大戦が勃発した。

　　　　①世界は、原子力時代に突入した。

　　　　②千年期後再臨説が描く将来像は、現実にマッチしなくなった。

　　　　③その結果、千年期後再臨説はほとんどの支持者を失った。

**Ⅳ．千年王国説の復興**

**1．千年期前再臨説の復興**

（1）19世紀に入ると、千年期前再臨説は復興し始めた。

　　　　①感情主義ではなく、神の国に関する聖書の教えの組織的学びが始まった。

②神の霊感と聖書の権威に対する信仰が、その土台にあった。

　　（2）19世紀の千年期前再臨説の復興は、英国で始まった。

　　　　①プリマスブレザレン（1830年代に設立）とジョン・ネルソン・ダービー（John

Nelson Darby、1800‐1882年）

②ディスペンセーショナリズムに基づく千年期前再臨説が発展した。

③19世紀の第3四半期に米国で広まった。

　　（3）千年期前再臨説を支持するリーダーたち

　　　　①D. L. ムーディ（D. L. Moody、1837‐1899年、伝道者）

　　　　②J.W. チャップマン（J. Wilbur Chapman、1859‐1918年、伝道者）

③R.A.トーレー（Reuben A. Torrey、1856‐1928年、牧師、神学者）

　　　　④ビリー・サンデイ（Billy Sunday、1862‐1935年、元野球選手の伝道者）

　　　　⑤A. B. シンプソン（A. B. Simpson、1843‐1919年、CMAの創立者）

　　　　⑥ジェイムズ・ブルックス（James H. Brookes、1830‐1897年、牧師）

⑦C. I. スコフィールド（C. I. Scofield、1843‐1921年）

　　（4）聖書学校運動（1800年代後半に始まった）

　　　　①宣教師訓練大学（ニューヨーク市　1883年　A. B. Simpson）

　　　　②ムーディ・バイブル・インスティテュート（シカゴ　1886年）

　　　　③1940年までに全米で78の聖書学校が設立され、ほとんどが千年期前再臨説。

（5）19世紀後半の聖書カンフェランスと預言カンフェランス運動

　　①ともに千年期前再臨説を強調した。

　　（6）The faith missions movement（教団の支援に頼らない宣教、1800年代後半）

　　　　①独立系、超教派の宣教団体で、その多くが千年期前再臨説を教えた。

　　（7）ユダヤ人伝道の宣教団体

　　　　①The American Board of Missions to the Jews

　　　　②The Friends of Israel Gospel Ministry, Inc.

　　　　③常に患難期前携挙説である。

　　（8）スタディバイブル

　　　　①Scofield Study Bible (first published in 1909)

　　　　②Ryrie Study Bible (1978)

　　（9）神学校

　　　　①ダラス神学校（1924年）

　　　　②Grace Theological Seminary（1937年）

　　　　③タルボット神学校

　　　　④Western Conservative Baptist Seminary

　　　　⑯教団

　　　　　　＊the General Association of Regular Baptists

＊the Conservative Baptist Association

＊the Independent Fundamental Churches of America

＊the Plymouth Brethren

＊the Grace Brethren

　　（10）復活した千年期前再臨説は、19世紀と20世紀の根本主義運動において主要な

　　役割を果たした。

**2．無千年王国説の復興**

　　（1）17世紀～20世紀の千年期後再臨説の衰退

①20世紀に起きた悲劇は、楽観的な千年期後再臨説の変更を迫った。

②その結果、ほとんどの千年期後再臨説者が、その立場を放棄した。

　　（2）2つのオプション

①千年期前再臨説を採用した場合

　　＊字義通りの神の国が成就するという確信を保持できる。

　　＊しかし、神の国が成就する方法について考え方を変更する必要がある。

②無千年王国説を採用した場合

　　＊字義通りの解釈と、字義通りの神の国の成就を放棄する必要が出てくる。

　　（3）千年期後再臨説者（保守もリベラルも）のほとんどが、無千年王国説を採用した。

　　　　①20世紀初頭、プロテスタントの大半が千年期後再臨説であったので、この変更

は無千年王国説の復興をもたらした。

②カトリック教会と東方正教会は、一貫して無千年王国説を採用してきた。

③そこにプロテスタントが加わり、20世紀半ばには、無千年王国説がキリスト教

界の過半数の見解となった。

**3．千年期後再臨説の復興**

（1）第二次世界大戦後、千年期後再臨説は死に絶えたかに思われた。

　　　　①千年王国に関する論争は、千年期前再臨説と無千年王国説の間が行われた。

　　　　②しかし、1960年以降に、異なった形の千年期後再臨説の復興が起こった。

　　（2）世俗的で反キリスト教的な千年期後再臨説

　　　　①人間の努力で地上にユートピア時代をもたらすことは可能だという確信

　　　　②科学的手法が有効であると主張する人もいる。遺伝子工学の発展。

　　　　③キリスト教的価値観を逆転させることこそ、理想郷を実現ために必要なことだ

と主張する人もいる。

④その中のひとりがチャールズ・A・ライク（Charles A. Reich、エール大学教授）。

　　＊“The Greening of America”『緑色革命』

　　＊「ドラッグの使用、勤勉な労働の軽蔑、性的放縦、ポルノなどが、ユートピ

アをもたらす道具になるかもしれない」

　　　　⑤トマス・ジョナサン・ジャクソン・アルタイザー（Thomas J. J. Altizer、アメ

リカ人、「神の死神学」の神学者のひとり）

　　＊「歴史のゴールデンエイジは、人類が、聖書の神は死んでいることを認め、

聖書的道徳基準を逆転させ、自分たちこそ神であると主張するまでは、やって

来ないであろう」

　　（3）保守的千年期後再臨説

　　　　①改革派（契約神学）の神学的伝統の中から出て来た

②互換性のある3つの用語

　　　　　　＊Dominion theology

　　　　　　＊Christian reconstructionism

　　　　　　＊Theonomy

　　　　③Dominion theologyは、聖書的キリスト教は社会の全分野を統治すると教える。

④Christian reconstructionismは、神の律法によって社会は再建されると教える。

⑤Theonomyは、旧約聖書に書かれた道徳法は今も有効であると教える。

　　＊祭儀法は、キリストの贖罪死によって成就した。

⑥モーセの律法に従って世界大の王国を造ることは、クリスチャンの使命である。

⑦これは教会が政府を支配するということではなく、政府が神の律法に従ってい

るということである。

⑧中心聖句　マタ5：17～19

Mat 5:17 わたしが来たのは律法や預言者を廃棄するためだと思ってはなりません。廃棄するためにではなく、成就するために来たのです。

Mat 5:18 まことに、あなたがたに告げます。天地が滅びうせない限り、律法の中の一点一画でも決してすたれることはありません。全部が成就されます。

Mat 5:19 だから、戒めのうち最も小さいものの一つでも、これを破ったり、また破るように人に教えたりする者は、天の御国で、最も小さい者と呼ばれます。しかし、それを守り、また守るように教える者は、天の御国で、偉大な者と呼ばれます。

⑨マタ5：13～16は、教会への命令である。全世界の社会的変革。

Mat 5:13 あなたがたは、地の塩です。もし塩が塩けをなくしたら、何によって塩けをつけるのでしょう。もう何の役にも立たず、外に捨てられて、人々に踏みつけられるだけです。

Mat 5:14 あなたがたは、世界の光です。山の上にある町は隠れる事ができません。

Mat 5:15 また、あかりをつけて、それを枡の下に置く者はありません。燭台の上に置きます。そうすれば、家にいる人々全部を照らします。

Mat 5:16 このように、あなたがたの光を人々の前で輝かせ、人々があなたがたの良い行いを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい。

　　　　⑩教会は福音の伝達を通してこの変革の中心的な役割を果たす。政府の役割を担

い、モーセの律法を執行する。

⑪デイビッド・チルトン（David Chilton, 改革派の米国人牧師）

　　＊「私たちのゴールは、キリストのリーダーシップのもとで世界を支配するこ

とである。これは、『世界の奪還』といってもいい。私たちの戦略は、先ず教

会の変革と再建から始める必要がある。そこから社会的、政治的再建が始まる。

キリスト教文明の開花そのものである」

＊「この世に対するクリスチャンのゴールは、聖書的神政政治の国造りである。

そこでは、生活の全領域が贖われ、イエス・キリストのリーダーシップと神の

律法の下に置かれる」

　　　　⑫Dominion Theologyの問題点

　　　　　　＊聖書の曲解。聖書的キリスト教に対する脅威である。

　　　　　　＊ゼカ14：4～9、マタ25：31～34などは千年期前再臨説を教えている。

　　　　　　＊信者には大宣教命令が与えられている（マタ28：19～20）。

　　　　　　＊終わりの日に、神ご自身が介入される（黙19：11～20：4）。

　　　　　　＊契約神学の垣根を越えて、他の教会にも広まっている。特にカリスマ的教会。

**PART Ⅲ：　千年王国説の聖書的吟味**

**はじめに**

（1）千年期前再臨説は、教会の最初の見解であった。

　　　　①それゆえ、聖書の教えである確率は高い。

　　　　②しかし、オリジナルかどうかよりも、聖書の教えと一致しているかどうかが重要。

　　（2）聖書の中の神の国という概念が、千年期前再臨説と調和するかどうか吟味する。

**Ⅰ．神の国の概念**

**1．神の国の概念は、神は主権者であるという事実から出てくる。**

（1）1歴29：11～12

1Ch 29:11 【主】よ。偉大さと力と栄えと栄光と尊厳とはあなたのものです。天にあるもの地にあるものはみなそうです。【主】よ。王国もあなたのものです。あなたはすべてのものの上に、かしらとしてあがむべき方です。

1Ch 29:12 富と誉れは御前から出ます。あなたはすべてのものの支配者であられ、御手には勢いと力があり、あなたの御手によって、すべてが偉大にされ、力づけられるのです。

　　（2）王国が成立するための3つの条件

　　　　①神は主権者であり、支配する権威を持っている。

　　　　②神は、支配する領域（天にあるものも地にあるものも）を持っている。

　　　　③神は実際にその領域を支配しておられる。

　　（3）神の主権と神の国は、密接に関連している。

　　　　①神の国は、聖書的歴史哲学の中心にある。つまり、聖書の中心テーマである。

**2．普遍的神の国と地上的神の国**

　　（1）聖書には、2つの神の国の概念が登場する。

　　　　①時間的区別

　　　　　　＊昔からすでに存在しているものである（詩103：19、哀5：19参照）。

　　　　　　＊将来実現するものである（ダニ2：44、7：13～14、27参照）。

　　　　②領域上の区別

　　　　　　＊普遍的である。宇宙全体が領域である。

（1歴29：11～12、詩103：19、詩135：6、使17：24）

＊地上的なものである。

（ダニ2：35、44～45、7：13～14、27、ゼカ14：4、9、黙11：15）

　　　　③統治形態の区別

　　　　　　＊神が直接宇宙の全領域を統治しておられる。

　　　　　　　　・ダニ4章で、神はネブカデネザルを辱められた。

　・ネブカデネザルは、神を「天の王」と呼んだ。

　・2列19章で、185,000人のアッシリヤ人兵士が殺された。

　・神は、人間の助けを借りずに一晩でこれをされた。

　　　　　　＊神は人間を用いて、間接的に統治される。

　　　　　　　　・詩2篇で、神は全地を統治するためにメシアを王として確立する。

　　　　　　　　・メシアに対する反抗は、神に対する反抗と見なされ、神の怒りを買う。

　　　　　　　　・神は人の子に王国を与え、支配させる。

　　　　　　　　・この王国は、諸民、諸国、諸国語の者たちから成る、地上的王国である。

　　　　　　　　・ダニ2章と7章は、神の国をこう描写している。神の支配は人間の仲

介者を通して実行される。それは、天の雲に乗って来られる人の子である。

・黙19章と20章は、キリストが地上に再臨し、神の国を統治すると教

えている。

・地上の神の国が、人間の仲介者であるキリストによって統治される。

**3．神政政治（神政主義、神権政治、theocracy）の現状**

　　（1）神は直接的に統治することもあれば、間接的に統治することもある。

　　　　①神政政治の神の国とは、神の支配が代理人によって実施されるものである。

　　（2）神政政治の神の国は、普遍的神の国より狭い概念である。

　　　　①神政政治の神の国は、地上の支配に限定されている。

　　　　②神政政治の神の国は、人間を通した神の間接的支配である。

　　　　③普遍的神の国は、直接的神の統治も、間接的神の統治も含む。

　　（3）神政政治の神の国は、神が代理人を立てている期間だけに限定される。

　　①人間の堕落以前、神は普遍的王国の地上部分の統治をアダムに委ねた。

　　②アダムは、その権威を神から委託された（創1：26、28、詩8：3～9）。

Gen 1:26 神は仰せられた。「さあ人を造ろう。われわれのかたちとして、われわれに似せて。彼らが、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地をはうすべてのものを支配するように。」

Gen 1:28 神は彼らを祝福された。神は彼らに仰せられた。「生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配せよ。」

　　（4）アダムの堕落により、地上における神政政治は終わりを迎えた。

　　　　①サタンの誘惑により、アダムは堕落した（創3章）。

　　　　②アダムはサタンに地上の統治者としての権威を譲り渡した。

　　　　⑨つまり、サタンは地上の統治権を神から奪ったのである。

　　　　　　＊theocracy→satanocracy

　　　　⑩サタンの支配は今も継続している。

　　　　⑪ルカ4：5～6

Luk 4:5 また、悪魔はイエスを連れて行き、またたくまに世界の国々を全部見せて、

Luk 4:6 こう言った。「この、国々のいっさいの権力と栄光とをあなたに差し上げましょう。それは私に任されているので、私がこれと思う人に差し上げるのです。

　　　　⑫ヨハ12：31、14：30、16：11　「この世を支配する者」

　　　　⑬2コリ4：4　「この世の神」

⑭1ヨハ5：19　「悪い者」

⑮1ペテ5：8～9　「信者は敵の領地に住んでいる」

　　（5）普遍的王国は神のものであり、地上の所有権も依然として神のものである。

　　　　①地上の神政政治だけが、人類の堕落とともに終わったのである。

**4．アダムの堕落以降の神の計画**

（1）神はサタンとその地上における支配を破壊する。

　　　　①これを、メシアによって行う。

　　　　②神は、地上の統治権を最後のアダムに与え、地上の神政政治を回復される。

　　（2）創3：14～15

Gen 3:14 主なる神は、蛇に向かって言われた。「このようなことをしたお前は／あらゆる家畜、あらゆる野の獣の中で／呪われるものとなった。お前は、生涯這いまわり、塵を食らう。

Gen 3:15 お前と女、お前の子孫と女の子孫の間に／わたしは敵意を置く。彼はお前の頭を砕き／お前は彼のかかとを砕く。」

　　（3）詩2篇

　　　　①メシア（神の子）を王としてエルサレムに立てる。

　　　　②この王は、神に敵対する勢力を破壊する。

　　（4）その他の聖句

①イザ9：6～7　ダビデの王座に着いて王国を治める幼子の誕生

②イザ11章　千年王国の預言

③ダニ7章　人の子に将来与えられる御国の預言

④ルカ1：30～33

　Luk 1:30 すると御使いが言った。「こわがることはない。マリヤ。あなたは神から恵みを受けたのです。

Luk 1:31 ご覧なさい。あなたはみごもって、男の子を産みます。名をイエスとつけなさい。

Luk 1:32 その子はすぐれた者となり、いと高き方の子と呼ばれます。また、神である主は彼にその父ダビデの王位をお与えになります。

Luk 1:33 彼はとこしえにヤコブの家を治め、その国は終わることがありません。」

　　　　⑤ヨハ12：31

Joh 12:31 今がこの世のさばきです。今、この世を支配する者は追い出されるのです。

　　　　⑥1ヨハ3：8

1Jn 3:8 罪を犯している者は、悪魔から出た者です。悪魔は初めから罪を犯しているからです。神の子が現れたのは、悪魔のしわざを打ちこわすためです。

　　　　⑦マタ19：28、24：29～30、25：31、34

　　　　⑧使3：19～21

Act 3:19 そういうわけですから、あなたがたの罪をぬぐい去っていただくために、悔い改めて、神に立ち返りなさい。

Act 3:20 それは、主の御前から回復の時が来て、あなたがたのためにメシヤと定められたイエスを、主が遣わしてくださるためなのです。

Act 3:21 このイエスは、神が昔から、聖なる預言者たちの口を通してたびたび語られた、あの万物の改まる時まで、天にとどまっていなければなりません。

⑨1コリ15：24～25

1Co 15:24 それから終わりが来ます。そのとき、キリストはあらゆる支配と、あらゆる権威、権力を滅ぼし、国を父なる神にお渡しになります。

1Co 15:25 キリストの支配は、すべての敵をその足の下に置くまで、と定められているからです。

　　（5）以上の聖句から、神は地上の歴史に対して計画を持っておられることが分かる。

　　　　①神だけが主権者であることを示し、ご自身の栄光を表す。

　　　　②千年王国は、最初にあった地上における神政政治の回復である。

　　　　③もし地上の神政政治の回復がないなら、神はサタンに敗北したことになる。

**5．黙示録の内容**

（1）サタンの支配に対する神の攻撃（3つのシリーズの裁き）

　　　　＊大患難時代（6～18章）

　　（2）イエス・キリストの再臨

　　　　＊サタンの軍勢を滅ぼす（19：11～21）。

　　（3）サタンが地から追放され、「底知れぬ所」に投げ込まれる。

　　　　＊20：1～3

　　（4）キリストの地上支配が1000年間続く。

　　　　＊千年王国（20：4～6）

　　（5）以上のことは、現在の地が破壊される前に起こる。

　　　　＊20：11

　　　　＊神は、現在の地の上に神の支配を回復される。

**6．神の国が私たちに与える希望**

　　（1）神は主権をもって人類の歴史を導いておられるという確信

　　（2）最終的に、善が悪に勝利するという確信

　　（3）キリストの再臨（携挙と地上再臨）を待ち望む生活

　　（4）天において愛する者たちと再会し、栄光のキリストを仰ぎ見るという希望

　　（5）イエス・キリストにあって救われているということへの感謝

　　（6）聖書が神のことばであるというより深い確信

　　（7）神の栄光という概念の重要性の再確認